

都立両国高等学校 学校訪問報告

日 時 平成 27 年 1 月 19 日 (月) 訪問者 大野教諭、青山教諭 対応者 酒井 教諭

1 学校概要

- ・ 1 学年 5 学級 2 0 0 名。
- ・ H 2 6 年卒業生の現役合格者数
国公立大学 5 7 名 (東京大学 1 名、名古屋大学 1 名、千葉大学 1 5 名他)、大学校 2 名、私立大学 4 6 0 名、短期大学 2 名 (現役進路決定率 82.7%)
- ・ 明治 34 年設立。昭和 24 年に男女共学化、平成 18 年度に附属中学校を開校。併設型中高一貫教育校の教育課程で高校がスタート。平成 23 年に創立 110 周年を迎える。
- ・ 平成 2 4 年度から 3 年間、東京都から **言語能力向上推進校** (2 6 年度は拠点校) に指定。

2 都立両国高校 (言語能力向上拠点校) の実践内容

(1) 附属中学校

- ・ 中 1 から中 3 まで実施される様々なプレゼンテーション活動を段階的に発展 (模造紙→パワーポイント、大人数グループ→少人数グループ→個人) させ、最終的には卒業研究に繋げる。
- ・ 中 1 からのオールイングリッシュの授業成果を国内でのイングリッシュキャンプ (中 2、3 泊 4 日) で試し、さらに海外語学研修 (中 3、9 泊 10 日) へと段階的に深化を図る。
- ・ 英語劇を学校の取組として位置づけ、指導体制 (教員、先輩等) の確立を図る。

(2) 附属中学校の実践を高校に繋げるもの

- ・ 考える国語 I (中 2) 実施のディベートと英語特講 (高 1) 実施の英語ディベートの関連・深化を図る。
- ・ 中学英語 (各学年) で実施のオーラルプレゼンテーションを高校英語でも継続させ、高校文化祭でのスピーチコンテスト、さらに外部でのスピーチコンテスト出場へ段階的に深化を図る。

(3) 高校

- ・ 考える国語 II (高 2) で **書評合戦(ビブリアバトル)** を実施し、読書への興味を醸成する。
- ・ **著名な作家(言葉に関する専門家)を招き、全校集会で生徒の作品の講評や添削指導** をしてもらうことで、生徒の実践的な文章力の向上を図る。
- ・ **国語、英語、世界史、化学、生物、美術、情報等の各科目の授業にペアワークやグループワークを導入** して、言語活動を通じた、より一層の科目の理解を図る。

3 言語能力向上拠点校授業公開及び成果発表会

(1) 授業公開

英語ディベート授業(高1)

- ・ **高校生英語ディベート大会のルールをもとに、ディベート大会** が行われた。事前学習として、生徒は各自で肯定・否定の両方の立論を作成しており (3 時間)、その後グループでの質疑応答や反駁、最終弁論作成をする (3 時間)。その後、対戦相手以外とのリハーサルを 2 回実施 (2 時間) し、本時は 9 時間目のディベートコンテストであった。
- ・ 生徒は事前準備をしてあることもあり、立論を堂々と分かりやすい英語で述べていた。しかし、質疑応答や反駁の時間になってしまうと、なかなか言葉が出てこないため、タイムオーバーになることも多くあった。これは、相手の言った内容がうまく理解できなかったことや、どのような質問や反駁をすべきか、直ぐに出てこないことが原因だと思われる。
- ・ **「成功体験よりも失敗体験を」** ⇒ 指導されていた山本先生は、授業を通して、完璧に準備され指導し、練習したものを発表して成功体験のようなものをさせるよりも、**できるだけ自分たちで考えさせ、授業では、失敗をしたという経験をたくさんさせることが、生徒の成長に大切だ** という言葉が印象的だった。

情報(高2)

- ・グループごとにソフトウェアを利用して映像作品を作る実習。作品スタイルの選択をしており、動画・静止画・音楽の利用・字幕使い方などが作品紹介という形で提示されていた。

国語(高1) 『土佐日記』を使った古典文法の確認

- ・授業の始めに、古典文法小テストの復習として、ペアで問題を出し合っていた。その後、土佐日記を使って、用言や助動詞の指摘と根拠をペア同士で確認し合っていた。
- ・授業中はペアで活動することが多かった。
- ・基本の流れは、**教員が課題を提示 → ペアで考え話し合う → 指名された生徒が発表**
- ・また、ペアは隣同士で活動をさせたり、途中で前後ペアに入れ換えたりしていた。
- ・生徒はペア活動や発表に慣れているようで、ためらいや戸惑う感じは全くなく、堂々と円滑に活動をしていた。お互い単純に答えを確認するのではなく、**答えの根拠を考え話し合う姿**が印象的であった。

生物(高1)

- ・授業はiPadや動画などの視聴覚機器を有効に活用しながら、生徒は3人1組となり、授業者との対話形式の授業の中で、配布されたプリントに自らメモをして内容をまとめていく。
- ・「疑問」で始まり、生徒が3人組で疑問を解決していく。
- ・授業者の提案に生徒が積極的に反応しているのが印象的であった。授業者の解説の際には生徒が静かに聞くということができており、**生徒の好奇心・探究心をくすぐる展開**だからこそ成り立つ授業だと感じた。
- ・振り返りシートという生徒の考えを吸い上げる方法も有効だと感じた。

(2) 成果発表会

①学校紹介及び全体の成果等

- ・高校生ビブリオバトル大会で関東大会進出、新聞社主催全国ビブリオバトル2014で全国大会進出
- ・平成26年度都立高校生言葉の祭典英語弁論の部優秀賞(第2位)、英語討論の部最優秀賞(第1位)

②国語科の取組

- ・授業では、**ペア活動やクラスで自分の意見を理論的に相手に伝えるなど、言語活動を通してより一層の科目の理解を図っている。**
- ・春休みの宿題として、近代をテーマとした作品を各自読み、書評文を作成する。その後、授業でビブリオバトルの原稿を作成し、各クラスでビブリオバトルを実施。優秀者は郊外のビブリオバトルへの参加をしている。

③英語科の取組

- ・授業では**教科書の文章の要約**をしている。始めは、100%要約だけだったが、**段階を踏んで要約50%と意見50%の英文を書くことができるようになった。また、写真を見て自由英作を50~60語で書かせる活動なども実施している。**
- ・文法の説明も、各自生徒が日本語で文法をプリント1枚にまとめる活動をしている。分かりやすい説明は印刷して生徒へ配ったりもする。**学んだことを自分の言葉で、相手に分かりやすく表現することは、言語活動として有効**であると感じた。
- ・英語科では**生徒が自由に考えて活動することを大切にしている。生徒自身が伝えたいこと、理解したいことは何なのか考える力を育てていくため、基本的にルールを引きすぎないようにしていた。**

④情報科を中心とするその他の教科の取組

- ・映像作品をグループで制作することで**課題解決型のアクティブラーニングの授業を展開。**

⑤海外語学研修旅行(中3)の取組

- ・アメリカ合衆国ユタ州プロボ市のブリガムヤング大学での英語のレッスンとホームステイ。